

日本建築学会優秀卒業論文賞・ 優秀修士論文賞

経過報告

本会では、1989年7月に設立された日本建築学会「建築教育振興基金（タジマ基金）」による学生を対象にした論文の顕彰事業で、「優秀卒業論文賞」「優秀修士論文賞」を設け、優れた論文を表彰している。本年はその第9回である。

本年は、第一次選考を重視すべく、第一次選考は論文概要のみを選考の判断材料としてきたが、論文概要だけでは判断し兼ねる場合には、第一次選考から本論文を参照することができることとした。また、応募論文募集方法について、全国の大学建築関係学科を通しての公募に加え、本誌に掲載して、より一層の周知をはかることとした。

本年も多くの方から応募があり、早速、卒業論文等顕彰事業委員会の中に選考部会（部会長：山崎均・大分大学教授）を組織して選考に入った。同選考部会では、短期間であったが精力的に作業が進められ、厳正なる選考が行われ、表彰論文を決定することができた。

今回受賞された論文の著者に対して心からお祝い申し上げるとともに、選考部会のご努力に改めて敬意を表す。また、残念ながら選考にもれた論文も内容的には表彰論文と大差なく、いずれの論文も優秀であり、応募に際してのご努力を多とするものである。

この事業は本年で9回目であるが、この顕彰事業の意義はますます高い評価を得るものと確信している。

本年の公募に際して多大なご尽力をいただいた各大学の関係者に心からお礼申し上げるとともに、今後も本事業に対して深いご理解をいただき、さらなるご協力を賜るようお願いする。

（卒業論文等顕彰事業委員会委員長 石村孝夫）

部門別応募数（総応募数142編／38大学等）

構造系卒業論文14編／4	計画系卒業論文36編／10	環境系卒業論文3編／1
構造系修士論文17編／3	計画系修士論文62編／10	環境系修士論文10編／2
構造系論文合計31編／7	計画系論文合計98編／20	環境系論文合計13編／3

※編のあとの数字は受賞数

選考報告

1989年に設置された建築教育振興基金（タジマ基金）による「卒業論文等顕彰事業」は、1998年で9回目となる。選考部会は、卒業論文等顕彰事業委員会の下部組織で、常置の各調査研究委員会から推薦された2名（構造・環境は3名）の委員、計24名により構成された。

第1回選考部会は、村上雅也・卒業論文等顕彰事業委員会委員長より召集され、1997年12月15日に建築会館会議室で開催された。選考委員の自己紹介の後、村上委員長より本事業の運営等について説明があり、運営規程、実施要領、選考要領、応募論文募集要項について審議した。1997年（第8回）選考部会からの申し送り事項について、以下のとおり審議を行った。第一次選考の段階では、論文概要を判断材料として選考することとされていたが、論文概要だけでは判断し兼ねる場合には、第一次選考から本論文を参照することができることとした。期間は3日程度とし、閲覧場所は建築会館会議室とした。それに伴い、選考要領の2.3)に「ただし、必要に応じて選考委員は本文を参照することができる」の文言を挿入することとした。また、応募論文募集のより一層の周知をはかるため、応募論文募集要項は、全国の大学建築関係学科を通しての公募に加え、『建築雑誌』に掲載することとした。最後に、村上委員長より、選考部会長として山崎が指名・承認された。

第2回選考部会は、1998年4月24日に開催し、関係規定類の確認、応募論文数および各部門別分類（構造系、計画系、環境系）の確認を行い、部門別分類に変更がないことを確認した。応募論文数は、卒業論文53編、修士論文89編の計142編で、昨年とほぼ同じであったが、部門別では、構造系31編（学部14、修士17）、計画系98編（学部36、修士62）、環境系13編（学部3、修士10）であり、それぞれ前年より6編減、27編増、15編減であった。授賞候補件数については応募件数に応じ、卒業論文は構造系4編、計画系10編、環境系1編の計15編とした。同様に修士論文は構造系3編、計画系10編、環境系2編の計15編とした。各部門ごとにこの授賞候補件数の範囲内で選考を行い、他部門との振り分けなどはしないことを確認した。選考要領について再度確認を行い、選考の基本的な方法は従来どおり二段階選考とした。第一次選考では、各部門の選考委員が論文概要を精読して授賞候補件数の約2倍の論文を選考し、第二次選考では、第一次選考で選ばれた論文1編につき2名の査読委員を定めて本論文を精読し、表彰候補論文を選考することとした。具体的な選考は各部会に一任することとした。各部門の部会を設置し、部会長を互選（構造系：池永博威君、計画系：中村攻君、環境系：田村明弘君）し、選考を開始することとし

た。なお、選考は公正かつ慎重に行うことを旨とし、とくに選考委員と応募論文の著者が、親族、師弟関係などにある場合には、その論文の選考に関わらないことを確認した。

各部門の選考終了後、第3回選考部会を1998年7月1日に開催し、各部会の部長から選考経過と表彰候補論文選考結果が報告された。選考報告および推薦理由書の確認を行い、選考部会出席者全員の一致をもって、1998年（第9回）の表彰候補論文として、卒業論文15編、修士論文15編を選考した。

（1998年卒業論文等顕彰事業委員会選考部会長 山崎 均）

構造系部会

本年の構造系の応募論文数は卒業論文14編、修士論文17編であり、また、応募大学数は14校で、昨年と比べていずれもやや減少した。研究内容は、半数の16編が地震に関連したものでその他は多岐にわたっているが、分野別では構造（基礎も含める）が多く、材料施工の数は昨年と同様に少ない。

第一次選考では、本年は8名の選考委員が31編すべての論文を査読して、三段階評価したもので、上位から卒業論文7編、修士論文8編を選出した。

第二次選考では、第一次選考で選出された15編についてそれぞれ2名の選考委員で本論文を精読し、卒業論文は「テーマと内容」「論理性と明確さ」「論文としてのできばえ」の3項目で、修士論文は「テーマの独創性・新規性」「豊かな萌芽性・将来性」「研究の進め方の論理性」「結論の明確さ」「論文としてのできばえ」の5項目で評価・評点をして、さらに評価メモや意見も参考にして選考委員間で慎重に審議のうえで、構造系部会の授賞候補数である卒業論文4編、修士論文3編を授賞候補論文として推薦することになった。

本年も水準の高い論文が相当数あり、また、選考の際に著者の独創性を評価することに苦慮させられたのは例年のとおりである。選考の席で議論されたひとつに、優秀卒業論文あるいは優秀修士論文の「優秀」の意味をどのように捉えればよいのかということがある。

真に学生らしいテーマや着想の研究が、選考から漏れることを危惧する委員の声も多かった。顕彰の意義をはじめとして、選考時期や選考方法について見直しをする必要があるのではないかと思われる。（構造系部会長 池永博威）

計画系部会

本年の計画系の応募論文数は、卒業論文36編、修士論文62編の計98編で、昨年より3割近い増加となった。応募論文の過半数を計画系論文が占める状態は、本年も不変であった。授賞候補数が全体の応募論文数をもとに各部門・部ごとに比例配分され、計画系の応募論文に対しては、20編（卒業論文10編、修士論文10編）を上限として配分された。

第一次選考では、各応募論文になるべく多くの選考委員が関わることを目標とし、1論文あたり6名程度の選考委員が査読することとした。選考委員は論文の概要により評価を行い、必要に応じて本論文を参照（本論文は学会事務局で日時を定めて開示）することとした。各選考委員は査読結果を3段階評価し、その結果、評価点上位から授賞候補数の2倍程度（卒業論

文17編、修士論文19編）を第一次選考結果として選出した。

第二次選考では、第一次選考より選出された卒業論文17編、修士論文19編について、「建築計画」「都市計画」「建築経済」「建築歴史・意匠」「農村計画」「海洋」「情報システム技術」といった大枠に区分し、なるべく内容に近い専門性を有する選考委員を各論文について2名割り当てた。卒業論文については「テーマと内容」「論理性と明確さ」「論文としてのできばえ」等を、修士論文については「テーマの独創性・新規性」「豊かな萌芽性・将来性」「研究の進め方の論理性」「結論の明確さ」「論文としてのできばえ」等を評価項目とし、そのうえで総合評価を行った。2名の選考委員が両者ともに総合評価が高く、かつ評価項目の評価点数の高いものは授賞候補論文として決定した。2名の選考委員の総合評価が分かれたものについては、論文内容にまで立ち至って検討し、必要に応じて選考委員全員で本論文も参考とした。こうした選考作業を経て、卒業論文10編、修士論文10編の計20編を計画系の授賞候補論文として推薦することとした。

総じて、計画系の応募論文は多数であり選考委員には相当の負担がかかったため、応募方法や選考方法等の改善が必要であろう。また、昨年同様に修士論文は、学術論文としての表面と実体が整っているものが多く選考は比較的スムーズであったが、卒業論文については選考の難しさを感じた。

（計画系部会長 中村 攻）

環境系部会

本年の環境系の応募論文数は、卒業論文3編、修士論文10編の合計13編であり、応募論文数は第7回の12編に次いで過去2番目に少ないものとなった。研究分野そのものは、音、振動、光、熱、空気、水、心理など多方面に展開されていた。

第一次選考では、3名の選考委員が全員ですべての応募論文を査読し、三段階で評価し、これらの評点を基礎資料とし検討を重ね、授賞候補数（卒業論文1編、修士論文2編）の2倍に当たる卒業論文2編、修士論文4編を選定した。

第二次選考では、3名の選考委員に6名の外部専門委員を加えた合計9名（1編あたり2名）で、第一次選考論文を精読した。卒業論文に対しては、「テーマと内容」「論理性と明確さ」「論文としてのできばえ」の3項目について、修士論文に対しては、「テーマの独創性・新規性」「豊かな萌芽性・将来性」「研究の進め方の論理性」「結論の明確さ」「論文としてのできばえ」の5項目について、それぞれ評価した。これらの項目にさらに総合評価を加えた各委員の評点（項目評価は5段階、総合評価は3段階）と講評をもとに、選考委員間で慎重に審議を行った結果、卒業論文1編、修士論文2編の授賞候補論文を選定し、選考部会に報告した。

今回は、応募論文数が少ないものの、多分野に分布しかつそれぞれに力作であり、絞り込みに苦労した面もあった。この質の高さの維持と量的な応募数の増加の必要性が痛感させられた選考経過であった。（環境系部会長 田村明弘）



PHC 杭損傷度モニタリングに関する基礎的研究

正会員 磯田裕樹 君 (東北大学)

正会員 井口春木 君 (東北大学)

本論文は、震災時に被害を受けた既製コンクリート杭に関して、被災杭の継続使用の可能性を判断する指標や判定基準を確立しようとする試みがなされている。実大級の RC 模型試験体を対象として、曲げ試験により所定のひび割れを与え、杭内部の損傷度をひび割れ幅、長さ、深さ、面積から総合的に評価を加えている。さらに、被害の程度をモニタリングする方法として、カーボンファイバーを杭外部に貼り付け、変化に伴う電気抵抗の変化に着目して、その可能性を追求している。

実験の作業密度からみても相当な努力が要求される内容であり、その成果に大きな発展性が期待され、今後注目を抱かせる内容として高く評価される。

信頼性理論による鉄筋コンクリート造建築物の耐震性評価

正会員 江原礼子 君 (横浜国立大学)

本論文では、鉄筋コンクリート構造物の耐力評価に信頼性理論を適用し、耐力評価に内在する統計的不確定性の定式化と実験データ等に基づく定量化を行って、その成果を試設計建物に適用して信頼性評価を試みている。

著者は、適用した理論と研究対象の性格をよく咀嚼して、綿密な論理を積み重ね、丹念な数量的検討を展開して、説得力のある考察を示しており、全体として統一感に富んだ破綻のない論文にまとめあげた力量と努力は高く評価できる。随所に感じられる思考力の強靭さは、著者の貴重な資質と評せよう。

ゴム球支承を用いた耐震構造システムに関する基礎的研究

正会員 大庭 章 君 (日本大学)

正会員 魚津忠弘 君 (日本大学)

軽量な木造住宅の免震装置としてゴム球を提案し、クリープ試験・鉛直方向静的載荷試験・動的移動実験・水平方向振動実験を行い、さらに水平方向振動実験の数値解析を試みて、両者の一致を確認している。土台と基礎の間にゴム球を挟みきわめて実用性の高い簡便な構法であるが、数十年の性能保持については、検証実験が必要と断っている。

あらゆる方向に動けるゴム球と木造を組み合わせる着想は、すでに積層ゴムの免震装置が存在するとはいえ、優るとも劣らぬものであり、念入りな実験と解析で実用性の実証を行い、今後の課題として耐久性を挙げている。高い評価に値する論文である。

N値を用いた埋め込み杭の先端荷重 沈下量関係の新評価方法

正会員 山口勝久 君 (京都大学)

本研究は、埋込み杭の先端荷重～沈下量関係をN値などの土質柱状図に基づいて評価する方法を検討したもので、主な成果は、①深さ方向にN値が一様でない場合にも評価できるように等価N値の考え方を提示した、②沈下量が小さい載荷試験結果も活用できる荷重～沈下量関係評価法を新たに提案した、③載荷試験データを増やして評価方法の信頼性を高めた、ことなどである。

過去の継続的な研究ではあるが、新たな考え方に基いて多くの知見を示していて、評価方法の適用範囲を広げて実用性を高めた内容は卒業論文として優秀であると考えられる。

育児をきっかけとした生活の拡張に関する研究

正会員 阿知波修二 君 (新潟大学)

育児(子どもはある程度自力で環境へ働きかけができるが、完全な独立は不可能)中の7人を対象に、居住環境・生活変化・交友関係に関するアンケート調査、外出時の育児者と子どもの関係が環境との関わり方への影響の与え方などの詳細な調査を行っている論文である。

育児者と生活と環境との連鎖的な、あるいはホリスティックな関係を分析し、類似した複数施設を生活範囲の中に持ち、各施設の価値付けを行い状況に合わせて活用していること、他者や育児者間とのコミュニケーションが快適な環境構築の要素となっていることなどの成果は、計量的な分析では得ることのできない着眼点をもつと評価された。

児童のイメージから捉えた河川空間の位置づけに関する研究 三重県宮川水系を対象として

正会員 石井史彦 君 (日本大学)

本研究は、いまだ自然が残る三重県宮川水系を対象として、イメージマップ手法などを援用しながら児童の遊びをとおした河川空間のイメージを浮き彫りにし、さらに児童の居住地内における地域空間のイメージ要素を整理しながら、これら河川空間を関連付けることによって、児童の河川空間との関わりを明快に導き出している。

研究の着眼点もさることながら、既往研究が的確に整理されており、テーマの位置づけや課題の設定が明快である。論文の構成、得られた成果の論理性や論旨の運び方など、卒業研究のレベルを越えた優れた論文として高く評価できる。

ムデルニスマの時代を生きた建築家とその作品

正会員 内山俊子 君 (日本女子大学)

歴史・地理の説明から入り、世紀末のムデルニスマが、カタルーニャの自立を求めるナショナリズムの高揚と重なっていたことを示している。ガウディを含むカタルーニャの建築家たち

が「ムデハール様式」に傾倒した理由、さらには、当時の高揚した気分が多く優れた建築作品を生む契機となり、晩年にはガウディが独自の道を歩む状況までもが、平易な文章で描き出されている。

結論も明快で、読んで面白い。卒業論文とはいえ注記がなく、参考文献が国内市販のものに限られるなど、研究としては惜しまれる点があるが、この描ききる努力を評価したい。

ラフ・ニ族の住居・集落空間の構成と変容に関する研究 ジャトブー村の事例を通して

正会員 大島亮子 君 (芝浦工業大学)

タイ山地民ラフ・ニ族(焼畑移動民)の定住化過程にある一集落を対象に、住居・集落空間の構成と変容を検証した論文である。詳細な実測・聞き取り調査等による資料のほか、所属する研究室が1994年に実施した調査の資料も引用・比較しつつ、定住化や異文化(タイ化、近代化)への適合プロセスに焦点をあてて分析している。とくに、住居の空間構成は綿密な実測調査に基づいてよく整理されており、定住化や異文化への適合による影響の現れ方・空間変容が論議されている。

異民族・異文化に関する建築学的知見を加えるものであり、優秀な卒業論文として評価できる。

住民参加による市町村都市マスタープラン策定の課題 春日部市の住民意見特性を中心に

正会員 春日克之 君 (芝浦工業大学)

各自治体で取り組まれつつある都市マスタープランの策定過程について考察した論文である。都市マスタープランの策定過程では住民参加が求められているが、そこではいかに住民の積極的な意見を引き出すかが課題となっている。論文では「二項対比分析」と称して、問題解決型の意見と将来志向型の意見を分けて興味深い分析をするなど、住民参加の抱えている現実的な課題に率直に取り組んでいることなどが評価に値する。優れた卒業論文といえる。

マルチメディアを用いた都市防災関連情報の伝達に関する研究

正会員 斉藤 圭 君 (芝浦工業大学)

本論文は、インターネットを媒体とした都市防災関連情報の地域住民への伝達システムの開発に関する研究である。阪神・淡路大震災の分析に基づき、都市防災情報の公開による住民の安全意識の高揚と、防災対策の総合化による効率的な事業の展開等の考察を行い、真摯な取り組みによりシステムの仕様を検討している点は高く評価できる。

インターネットの普及の現状や、都市防災情報に対する一般住民の理解の程度といった問題については検討が不十分な点も見られ、将来の展開に期待するところが大きい。卒業論文としては高く評価できる。

近世京都における遊歩空間の形成 名所案内記における洛中洛外の空間論的考察

正会員 菅井聡子 君 (京都大学)

本論文は、近世京都における多数の名所案内記を題材として、それらを比較検討することで、遊歩空間としての近世京都の都市空間の構造を解明しようとする試みである。着想の独自性に加え、多数の史料の丁寧な扱い方、さらに実地踏査を含めた実証的な分析手法は的確かつ緻密である。

年代・空間・景観さらには人の行為などの各視点から、京都の空間構造を多義的に描き出すことに成功した労作として評価できる。

建築形態の4次元デジタルデザインに関する研究

正会員 田中浩也 君 (京都大学)

近年、建築デザイン分野でのコンピューターの利用が広く行われるようになってきているが、造形行為そのものへの適用は、様々な手法によるいくつかの試みがあるが実用の域を感じさせるものは少ない。

本論文はそのような試みのひとつの方法として、胞と定義する3次元空間の単位をコンピューターにより4次元処理を行い、建築の3次元空間を創り出す方法を提案している。論点が明確で論の展開も歯切れがよい。グラフィックスの扱いは論文の新しいスタイルを感じさせる。ケーススタディのいくつかが国内コンペに入賞しており、さらなる研究の展開に期待がもてる。研究内容はこの分野の研究に一石を投じ得るものであるが、既往研究との切り分けの不明瞭なことが気になるところである。

都市の不整形街区における空間把握に関する実験的研究

正会員 三浦智基 君 (東北大学)

本論文は、都市の不整形街区に着目し、人の空間認知の仕方を調査したもので、テーマの着眼点、興味のもち方がおもしろく評価できるものである。また論理のすすめ方も明快である。K.リンチをはじめ空間認知についての既往研究の批判的検討の上に、調査や論考が組み立てられていれば、この分野での新しい視点を開拓することも期待できる。

実験地や被験者の階層が限られており、この点でも普遍化への努力が必要である。

都市計画マスタープラン策定における地域提案策定プロセスの比較分析 中野区15地域協議を事例として

正会員 三ヶ部礼貴 君 (芝浦工業大学)

本論文は、積極的に自ら策定プロセスに観察者として参加し、多くの情報を一定の分析枠のなかで収集・解析したものである。テーマそのものが重要な現代的課題であり、また、実態

の的確な把握、卒業論文らしい新鮮な視点がいくつかある点を評価した。

今後はさらに問題意識を鮮明にし、それにもとづく分析視点をもって展開してほしい。

新幹線及び在来線沿線住民の振動被害感の相違に関する研究

正会員 梅田成道 君 (横浜国立大学)

本論文は、新幹線地区・在来線地区という2つの鉄道沿線地区の振動及び音(物理量)に対する住民の反応(心理量)の関係と意識のあり方を解明しようとしたものである。散歩のできる場所、地域の防災対策、周辺の静けさ、街の美しさ、買い物の便、交通の便、家の中の振動などが新幹線地区の方が不満度が高い。振動および他の騒音についてのアンケート分析から、新幹線地区が過剰な意識を持っていると分析している。

全体として、アンケート結果を丁寧に分析していて分かりやすい。

推薦理由(優秀修士論文賞)



直下型地震における地震動方向性と構造物の応答に関する研究

正会員 竹中宏明 君 (東北大学)

本研究では、はじめに国内外で記録された多くの直下型地震の地震動記録の分析結果と不整形地盤構造を考慮した理論地震動解析結果との比較により、地震動の方向性に関する定性的な傾向を明らかにしている。続いて、このような地震動の方向性の強弱がせん断型振れ構造モデルの応答に及ぼす影響を、新たに考案した解析手法を駆使して検討している。先の兵庫県南部地震後に、今後の耐震設計方法の問題点とされている事項に取り組んだ意欲的な研究である。

論文の構成も確かで充実した内容であることにより、優秀修士論文として推薦する。

地震動エネルギー入力に基づく鉄筋コンクリート造建物の応答変形推定に関する研究

正会員 中村孝也 君 (東北大学)

本論文は、鉄筋コンクリート造建築物を対象にして、地震動によるエネルギーの入力過程を瞬間入力エネルギーで評価することによって、地震時の応答変形を推定する手法を提案したものである。すなわち、地震時に建物に入力される瞬間最大入力エネルギーと構造物の損傷には深い関連があり、瞬間最大入力エネルギーは弾性時と弾塑性時の値は同程度であることに着目して、弾性時の瞬間最大入力エネルギーを用いて弾塑性時の所要耐力あるいは応答最大変形を簡便に推定する手法を示したもので、建築構造物の耐震設計法に対して新たな知見を与えた論文である。

リアルタイムオンライン応答実験システムの開発と免震建物地震応答への適用

正会員 政岡暢昭 君 (京都大学)

本論文は、サブストラクチャー法を採用した多自由度系に対するリアルタイムオンライン応答実験を可能とするシステムを構築したものである。すなわち、振動台では代替できない耐震実験法として開発された従来のオンライン応答実験をさらに改良し、地震応答解析による次のステップの変位応答値が計算されるまでは、過去の変位歴を参照しながら仮想の目標を外挿して与え続け、次ステップの応答値が得られた時点で内挿に切り替えることにより、リアルタイムで動的な加力実験を実現したものである。

研究の展開と論理性、結論の明快さ、今後の発展性とも優秀修士論文として高く評価できる。

幕末における上田藩武家屋敷 史料による復元と考察

正会員 浅野伸子 君 (昭和女子大学)

幕末における上田藩の城下全体について、武家屋敷の配置と住居平面構成の特徴を明らかにした論文である。豊富な一次史料を丹念に対照し、藩の平面定法(家格・役職に応じた住居平面と規模の基準)と家格の対応関係、藩や居住者負担によって行われた建出し(増築)による平面と規模の変化(平面定法と実際住居の相違)、実際住居と家格の対応関係等各階級における武家屋敷の具体的様相と上田藩武家屋敷の特徴をよく論究している。

理解のしやすさのためには章構成や論述の進め方に工夫の余地があるが、優秀な修士論文として評価できる。

鍍絵の地域的分布と左官技術の展開

正会員 石井達也 君 (日本工業大学)

本論文は、漆喰による装飾としてのいわゆる鍍絵を全国的に調査収集し、その分布、年代、絵柄、技術、施工箇所などの面から実証的に検討した労作である。これまで鍍絵に関する実証的研究はなく、その意味で本研究により収集された約750件の鍍絵のリストは、それ自体資料的価値が高く、今後のこの種の研究の展開を考えるうえで重要な成果であると評価できる。

ただし、各地の鍍絵に関して、その成立過程や入江長八およびその弟子たちとの影響関係など、検討すべき課題も多く残された。今後の研究の進展に期待したい。

病院手術部門における室配置の発想支援手法とプラン評価へのGA適用に関する研究

正会員 岩田伸一郎 君 (京都大学)

本論文は、建築計画の伝統的問題である室配置について、病院の手術部門を事例として、遺伝的アルゴリズム(GA)を適

用した計画支援手法の開発に関する研究である。1964年に提案されたプログラム解法による最適化事例に対して、GAを用いた手法を比較しながら論を進めており、論文の構成や説明も十分明快なものである。また、実際の設計過程への応用についても検討がなされており、実用的な発展が期待できる研究である。

以上のことから、本論文は修士論文として優れたものであると判断される。

「なじみ」からみた痴呆性老人のケア環境に関する研究 グループホームにおける生活構成の考察を通して

正会員 巖 爽 君 (東京大学)

「なじみ」という視点からグループホームにおける痴呆性老人の生活構成を詳細に観察調査を行い、ケア環境と入居者の生活領域の関係を綿密に分析した論文である。入居者と入居者グループの2つの視点から、生活構成とケア環境(運営的・社会的・物理的環境)要素が整理されている。入居者個人の空間的な「なじみ」の程度によって生活の拠点が異なるため、介護者のケアの内容も「なじみ」の程度によって変えるべきとの提言が行われている。

入居者のグループ活動の重要性の指摘や、先行研究や概念に対する定義なども過剰にならず、適切にまとめられている論文といえる。

要素と配置構成から見たイラン建築水空間秩序及びカナート水路との関係

正会員 小林由佳 君 (東京理科大学)

イスラム都市の構成原理を水路や軸によって明らかにしようとした論文である。角度をもとにした都市軸の考察は興味深い。また、プレゼンテーションもよくできている。都市軸の構成パターンについて代表的な事例を取り上げて、現地調査より得られた結果をもとに、独自の文献調査などを用いて詳細に解析できればさらに発展するものと思われる。

アメリカ合衆国における歴史的建造物の保全と活用に関する研究 シアトル市の中心市街地における事例を通して

正会員 曾野正之 君 (神戸大学)

本論は、膨大な保存調査を自らの手で行い、アメリカにおける保存政策とその事例分析を行ったものである。事実に基づき論を展開しようとした点、複雑な内容をよく整理している点を大いに評価した。

今後の課題として、やや間口を広げすぎた感もあり、テーマ、焦点を絞り深めること、類似研究のアメリカの大学での到達点を押さえ、さらに筆者独自の視点の構築に努めてほしい。

環境視情報の計測に基づく街路空間の分節化に関する研究

正会員 長谷川諭 君 (東京工業大学)

本論文は、原宿の表参道を事例として、街路空間を魅力的なシークエンス空間として設計する基礎的な手法を探索したものである。実空間における街路空間の分節化の傾向と環境視情報の計測結果とを照合することにより、街路空間の分節化の要因を抽出するとともに、街路模型によるシミュレーションを行って、それらの要因の妥当性を検証している。

物理的特性と心理的特性との対応を多様な手法を組み合わせで検討した研究であるが、被験者数の少なさから結果の信頼性にやや疑問は残るものの、論旨の展開は明快であり、論文のできばえを含めて、優秀な修士論文として高く評価される。

近世中後期の巨大都市と建設請負業 四大橋普請体制の社会的研究

正会員 藤尾直史 君 (東京大学)

近世中後期の建設請負業の実態を、江戸の橋普請に関する史料をもとに解明した研究である。普請の体制、工事にかかわる主体、および実務を担う大工、人足との関係などを実証的に検討することによって請負業者の位置づけを試みている。

論文構成としては、橋の普請体制の基本的枠組みを整理したうえで、請負人と普請請負人、大工・人足とによる普請体制の組織構造を実証的に描き、ついで個々の請負業者の活動に着目した検討を行い、さらに普請にまつわる興味深い事実に言及している。

史料研究には方法的な困難さがあるが、その制約のなかで豊富な史料に基づいた多角的な検討を行い、当時の橋普請の実態を鮮明に描き出した力作として高く評価できる。

建築プロジェクトにおける顧客満足に関する研究 建築家・設計事務所の提供業務と建築主の満足度分析

正会員 三井所隆史 君 (京都大学)

建築家・設計事務所の提供業務を満足度という視点から評価した注目すべき論文である。建築主調査、建築家・設計事務所調査を通じて設計事務所の提供業務と建築主の満足度との関係の構造化を図っている。また、設計事務所をデザイン指向とマネジメント指向という類型に整理し、それぞれの将来の業務提供の指向性の違いを明らかにしている。最後に、建築主の満足度を高める新業務を提言し、先進事例調査を通じてその成立可能性を確認するなど、興味深い内容である。日本建築家協会(JIA)の業務規定に対する提案という社会的な意味を持っている。研究テーマの設定や研究方法の論理性など申し分ない論文である。

中世後期トスカーナの宗教建築にみられるポリクロミアに関する研究

正会員 吉田香澄 君 (東京芸術大学)

単に現存する建築についてポリクロミア現象を分析するだけでなく、有色石材の産地や地域別の石材使用頻度を明らかにし、そのうえで現地調査を行い、実証的方法に徹して、ポリクロミア現象を典型的・体系的に捉えようとしている。最後は、構築年・分布状態、さらに河川や街道との関係を調べて、伝播経路を歴史的に解明しようとする。

その手堅く緻密な研究は、修士論文としては模範的と評価できる。今後の研究の展開を期待したい。

着衣における水分蓄積を考慮した人体の非定常温熱生理応答

正会員 梅野徹也 君 (京都大学)

本研究は、人体の生理的応答について着衣での水分蓄積を考慮し、非定常問題として、皮膚温、着衣温変動を新しいモデルをもとに説明している。特に着衣の皮膚への接触状況の導入、汗の付着の考慮が成功している。ただ、既存モデルとの関係が

不明確であり、従って結論が既存モデルとどう結びつくかに戸惑う部分も残している。

とはいえ将来の発展を十分に期待させるものであり、顕彰に十分値する。

都市計画のための気候解析に関する研究

正会員 竹林英樹 君 (神戸大学)

本論文は、最初に神戸地域における土地利用データや熱環境に関する膨大な都市環境データをクリマトープという形で要領よくまとめ、次に、気象官署等や実測した結果から神戸地域内の風環境を解析検討している。最後に、市街地の熱環境の改善に効果があると考えられる六甲山近くに生じている冷気流の実測を行い、その結果を解析している。

今後さらに深刻となると考えられる地球環境の問題や都市環境の改善に関して、本論文は極めて有益な資料を提供している。また、都市環境の数値シミュレーションを行う際に必要なデータベースとしての有用性も十分にあり、優秀修士論文賞に値するものと考えられる。今後、得られた資料をもとに研究が発展することを期待する。